

越境者の後ろ姿

星野 智幸

ラテンアメリカ性を体得していくとは、異端として生きること。極端な言い方かもしれないが、それが、私が野谷文昭先生から教わった人生のあり方である。異端を、越境者や混血と言い換えてもよい。

私が野谷先生の名前を知った 1990 年代初めは、ラテンアメリカ文学を専門的に学べる授業など、まだ大学にはほとんど存在していなかった。

そのころ新聞記者を辞めてメキシコに住もうと考えていた私は、その前にどうしても野谷先生とお近づきになりたかった。先生の翻訳書、著作、そこに収録されていない文章を手当たり次第コピーして読みあさった結果、文学はもう終わりを迎えているというそれまでの私の諦念は、完膚なきまでに破壊されていた。先生の繰り出すラテンアメリカ文学は、未来そのものだった。それで、立教大学ラテンアメリカ研究所（ラテ研）の先生の講座を受講した。

一般向けの公開講座だから、いろいろな人が集まっていた。社会人、文学部ではない学生、フランスからの留学生、定年退職者、NHK スペイン語講座の人気講師だった野谷先生のファンである年配の女性たち。研究職の人材を育てるには物足りない環境だったかもしれないが、私にはその多様性がラテンアメリカ性を体現しているように思えた。

既存の各国語文学と違い、ラテンアメリカの文学はネーションや言語が同じという意識によって誕生したわけではなかった。中南米カリブ地域に生まれ育った作家たちが、キューバ革命などいくつかの鍵となる出来事によって、自国ではなくラテンアメリカという広くて緩い縛りのアイデンティティを自覚することで作り上げた文学が、ラテンアメリカ文学なのだ。それは、何らかの共通項ではとてもくくりきれないほどの多様性を持ちながら、ラテンアメリカ性としか言いようがない巨大な普遍性も備えていた。マイナー性を抱え込んだ異端が、それぞれの正統性を矛盾なく持ち続けられる空間と言えようか。

このようなラテンアメリカについての認識こそ、私が野谷先生から学んできたものである。私は、先生が専門的なラテンアメリカ文学のコースを制度上持てないことに無念を感じつつ、そういう既成の文学の制度からはみ出ていることに可能性を感じていた。道なき道を歩いていく先生の姿を見て、私は自分がメキシコへ行くことの意味を知ったのだ。野谷先生からは、ラテンアメリカ文学についての基礎や考え方を教わっただけでなく、ラテンアメリカ的なあり方をこの日本のアカデミズム社会で体現しようと格闘している姿勢に、大いに学んだのであった。それは私の進む道に大きな影響をもたらした。

立教のラテ研で同じ受講生として知りあったのが、今はいくつかの大学でスペイン語の講師をしている熊倉靖子だ。熊倉は私から少し遅れてメキシコにやって来る。よい意味で年の差を感じさせない熊倉とは、その後、野谷先生のもとで一緒に小説の下訳に励んだりすることになる。

講座を取って半年後に渡墨した私は、そこで自分と同じような者たちと出会う。すなわち、ラテンアメリカ文学に惹かれ、仕事を辞めて自費でメキシコに渡って来た同世代の日本人。それが、久野量一であり、真下祐一だった。さらに半年後、熊倉が現れ、交換留学で訪れた内田兆史がそこに加わる。

みな、何者でもなかった。内田だけは学生だったが、もとは立教の英文学専攻だったのが、ラテンアメリカのほうへ道を逸れて、別の大学で一からやり直しているのだった。誰もが周り道をしていること、ラテンアメリカ文学病に罹っていること、メキシコにいること、だけが共通していた。

このメンツが再び顔をそろえるようになるのは、それからさらに数年たった、1990年代半ばである。正確な年は覚えていないのだが、私が1995年の夏に2度目のメキシコ留学から帰ってしばらくしてから、「野谷ゼミ」がスタートした。

それまでに各人もさらに周り道をしていたが、このころには全員が研究職の方向に進み始めていた。私もその道を考えた時期が少しあったのだが、私なりのラテンアメリカ的生き方はもっと別のあり方を欲していた。野谷先生が「トモ（と、私はラテンアメリカ仲間からは呼ばれている）はこの先どうするんだろう？ 在野の研究者というわけにもいかないだろうに」と心配していたと、人伝てに聞いたりして、少し心苦しかった。90年代半ばにはすでに、小説を書いて文芸誌の新人賞に応募していたが、先生にも誰にも内緒にしていたのだ。

久野や真下を野谷先生に引き合わせ、自主的に先生を囲むゼミを開きたいと相談したら、先生は快諾してくださり、ブーゲンビリアなど植物にあふれる先生の阿佐ヶ谷のご自宅で、数か月に一度（だったと思う）開くことになった。異端たちが先生のもとに集ったのは、ごく自然な流れだったといえよう。

先生の指導は容赦なく、発表内容に厳しく批判を加えるだけでなく、私たちが発表者へ実のある批評を行うよう、苛烈に尻を叩く。終わって夜になったら、飲みに出る。夜中まで飲んで、また先生の家に戻り、ダイニングで雑魚寝したこともあった。先生は、このゼミのメンバーに修業のための下訳を課したり、さまざまな商業メディアのラテンアメリカ文学関連の原稿を割り振ったりしてくださった。

とにかくアカデミズム以外の、映画や現代文学の業界にも通じているので、先生はめっぽう人脈が広い。私が1990年代の後半、食うに食えずに困っている中で何とか字幕翻訳

の仕事にありつけるようになったのも、野谷先生のお宅のパーティーで知りあった映画配給会社の方との縁がきっかけだった。先生ご自身は気づかなかったかもしれないが、私は食いぶちの面でまで先生のおこぼれに預かっていた。

この自主ゼミでそれぞれが発表したものが、今に至る各自の専門領域となっている。私はたとえば、一度はプイグとアルモドバルの作品を分析することでメロドラマの力を考える、という研究めいたものを行ったが、1997年の最後の自分の回では小説を発表した。

厳しい意見が多々出たが、その小説は何とか文藝賞を受賞し、私のデビュー作となった。受賞する前に読んで率直な意見をみなが述べてくれたことは、かけがえのない宝となった。受賞してからではそこまで本音を聞くことは難しいと、後になってわかったから。

私の受賞や各人の修論の執筆、先生の二度目のサバティカルなどで、野谷ゼミは20世紀のうちに発展的解消を遂げた。その一部は「ボルヘス会」に引き継がれたと、私は思っている。私だけはアカデミズムの世界からは外れていったが、四人が野谷先生の後を継いで大学教員となり活躍していることは、ご承知のとおりだ。制度なき多様性と普遍性の荒野を一人歩まれた野谷先生の足跡を、私たちはたどっている。